

# 資料涉猟余話

その131

前回述べたような経緯で天龍峡が世に知られるようになる

難。維新後、明治政府に出仕して太政官大書記官となり、三

## 天龍峡記と天龍峡十勝

日下部鳴鶴と天龍峡十勝

鎌倉 貞男



日下部鳴鶴

鶴はそれらを「磨崖の碑」にしようと考え、岩壁に刻すべき十勝名を揮毫した。

の碑」にしようと考え、岩壁に刻すべき十勝名を揮毫した。しかし、それらを切り立った岩壁に岩彫りすることは、決して容易なことではなかつた。低い場所

漢詩文で深められた名勝地にしようとして「天龍峡十勝」を選定した。その結果、例えば「太田に

この秀麗な自然美を漢詩文で深められた名勝地にしようとして「天龍峡十勝」を選定した。その結果、例えば「太田に乗って彫った場所

ば、かつての「太田に」もあるという。この「浴鶴巖」に、「花立

「千畳敷」は「仙牀」である。この事業には多額の費用を要した。そのために松泉は、地元の有力者である安藤弥十郎・今村栄太郎・関島鎌太郎・牧内新三郎・塩沢太一郎等に助力を依頼した。また、先述の米沢は飯田の素封家、上柳喜右衛門・木下与八郎等に依頼して、資金援助を仰いだ。そうした人々の努力が実り、明治十六年十二月に天龍峡十勝の磨崖の写真と石刷

天龍峡十勝の詩。北利橋上東地内自静竹心外奇人洞有仙境山出清流不受暑朝月照湖底時看仙鶴集巖下鏡在洗日影出雲風撲夕煙返紅銀鳥聲鳥飛峰山中妙竹葉外月天京春風花散紅銀鳥

鳴鶴が揮毫した十勝の詩

部鳴鶴がいた。日下部鳴鶴(一八三八〜一九二二)は、彦根の人。名は東作、彦根藩士田中氏の二男に生まれたが、長じて日下部家を嗣ぐ。養父は「桜田門外の変」で殉

難。維新後、明治政府に出仕して太政官大書記官となり、三

た奇勝天龍峡を探索した鳴鶴と松泉は、この景勝地を古代中国の神仙思想に基づいて、不老不死の仙人が住むという「藐姑射」の神仙郷に位置つけた。そして、

その結果、例えば「太田に乗って彫った場所」もあるという。この「浴鶴巖」に、「花立」は「龍角峰」に、下徳安・沖田亀一等

の事業には多額の費用を要した。そのために松泉は、地元の有力者である安藤弥十郎・今村栄太郎・関島鎌太郎・牧内新三郎・塩沢太一郎等に助力を依頼した。また、先述の米沢は飯田の素封家、上柳喜右衛門・木下与八郎等に依頼して、資金援助を仰いだ。そうした人々の努力が実り、明治十六年十二月に天龍峡十勝の磨崖の写真と石刷